

## 学びでつくる、文化の香り高いまち

目黒区長 青木 英二

めぐろシティカレッジ講座の開講20周年、誠におめでとうございます。

目黒区では、区の目指す将来像に向けて4つの基本目標を掲げています。その第1が、「豊かな人間性をはぐくむ、文化の香り高いまち」です。

これは、区民一人ひとりが個性や能力を発揮し、生きがいを持って生活できるよう、社会教育、スポーツ・レクリエーション、芸術文化の振興など、生涯を通じて主体的に学ぶことができる生涯学習社会の諸条件が整備されたまちを目指すことです。

めぐろシティカレッジ講座は、この目標に向けての施策の一つとして、平成7年に、当時の東京都立大学、同付属高等学校、東京都教育庁及び目黒区の四者が協力して立ち上げた生涯学習講座です。大学に匹敵するようなハイレベルな講義を聴きたい、幾つになっても学び続けたいという皆さまの熱い思いに支えられて続けることのできた、たいへん貴重な20年間だと思います。

講座を企画するめぐろシティカレッジ振興会の皆様の長年にわたるご尽力に感謝申し上げるとともに、めぐろシティカレッジ講座が多くの受講生でにぎわい、将来に向けてより一層発展されることをお祈りし、お祝いの言葉といたします。

## 地域に学び、地域に生かす生涯学習の推進に向けて

目黒区教育委員会教育長 尾崎 富雄

めぐろシティカレッジ開講20周年を心からお祝い申し上げます。

東京都立大学の移転後、目黒の地で培ってきた研究や教育の成果を地元の皆様に還元したいとの、東京都立大学及び同大学付属高等学校並びに東京都教育庁関係者の皆様の熱意とともに、めぐろシティカレッジ講座を愛し、支えてくださった多くの区民の皆様のおかげと感謝いたしております。

目黒区教育委員会では、昨年度「生涯学習実施推進計画」を改定し、「区民が主体的に学習活動を行う生涯学習」と「豊かな地域社会の形成に生かすことができる生涯学習」を基本目標としました。そして、この基本目標の達成に向け、学習・交流機会の充実を図るため、『めぐろシティカレッジの実施』を重点プロジェクトの1事業として位置付けております。めぐろシティカレッジの講座を通じて、多くの区民の皆様が地域に学び、その成果を地域に生かしていくことのできる生涯学習を推進していきたいと考えています。

結びに、めぐろシティカレッジの関係者並びに受講生の皆様のご健勝・ご多幸とともに、めぐろシティカレッジ振興会のさらなるご発展を祈念しまして、お祝いの言葉といたします。

## 「めぐろシティカレッジ」二十年間に思う

元目黒区教育長 大塩 晃雄

「めぐろ C・C」の開設に関わった者の一人として、「めぐろ C・C」が開校に二十周年を迎えたこと心からお祝い申し上げます。

「めぐろ C・C」は目黒区が都立大学跡地に文化・スポーツ施設等を建設していくことを検討していく中で、東京都立大学等の協力を得て他区にはない新しい区民の生涯学習の場をつくらうとうことで開校しました。

その「めぐろ C・C」が二十年の歴史をつくり、現在では、目黒区民の生涯学習の中に大きな比重を持って定着してきていることに私は感慨深いものがあります。二十年の積み重ね、これまでの会長をはじめ役員の方々、事務局を担う目黒区教育委員会の皆様、中でも毎年受講生にとって魅力的な講座をつくってきたカリキュラム委員の皆様の皆様のご苦勞とご努力があった賜物と思っています。

これからも「めぐろ C・C」が設立の「理念」を大切にし、その理念を生かした「特色」を基本とした講座を開講し、目黒区の生涯学習の大きな柱となり、目黒区民の生涯学習ニーズに的確に応えていくことが、次の歴史を彫んでいくものと思っています。

二十年間誠におめでとうございます。

## めぐろシティカレッジ20周年に寄せて

理事 カリキュラム委員 越田 年彦

理事・カリキュラム委員として、シティカレッジの運営に参画するとともに、「思想家は何を考え、どう生きたのか」の講座の企画を担当しています。

私は1990年度から2001年度まで都立大学附属高等学校に勤務しており、職場の一員として、めぐろシティカレッジの創立や授業の様子を見聞していました。また、「目黒学」で「目黒・東京のごみ問題」の講座を2度担当したことがあります。

あの当時から現在にかけて一貫して想い続けていることは、受講生の方々の知識や学習に対する意識の高さです。ともすれば、学びが成績や単位認定、業績評価に連動することが多いなかで（私自身、そうした立場に今でも身を置いている1人ですが）、「知らんがために知る」を実践している皆様の姿に感銘を受けています。

これからも皆様が希求する知はどのようなものなのかを問い続けながら講座を創っていく所存ですが、そのためにも、2014年夏に実施した富士山巡検のような宿泊旅行を続けることができないかと模索しています（例えば、西田幾多郎の生地を訪ねる北陸旅行など）。また、受講生の皆様の間につながりが高まるような試みをもっと取り入れたいと考えています。

## めぐろシティカレッジ講座・カリキュラムについて

カリキュラム委員長 山崎 憲治

めぐろシティカレッジが開講したのは、平成7年10月7日である。人文科学講座「目黒学」と「パソコン講座」の2講座が開かれた。目黒の地で新たな「生涯学習」を担うという夢の始まりであった。都立大学と都立大学付属高校の教員が連携して、意欲的な講座を組もうとした。地域を知ることが、次の地域をつくることだという視点、「パソコン」のスキルだけでなく、その歴史と将来像に目を向ける視点は、新しい学習の出発にふさわしいものだった。翌年には「男の目、女の目/家庭・学校・地域・社会」が生まれ、新しい視座が提起されている。「……きっと、恋人から奥様から夫から同性から「翔んでる貴方」といわれること間違いない」がその講座の誘いの言葉であった。10月開講、翌年の7月終了を、世間の学年暦に合わせて4月開講に転じたのが平成10年度からである。翌平成11年度からはめぐろシティカレッジは4講座体制に成長していく。

20年間講座を続けることができたのは、受講者が支えてくれた点が第一である。同時に講師の方から「めぐろシティカレッジで楽しく講義ができた」という声を度々聞くことができた。気持ちよく講義が展開されることは、このごろは「当たり前」の話でなくなってきている。どの教育現場でも教室は「生徒と教師がともにつくる学びの場」でなければならない。口をあけて押し込まれる知識を待つ世界ではない。教師もそこで学ぶという原点は忘れてはならないと思っている。Learning to know, に止まらず、Learning to do, Learning together, Learning to be へ広げることが学びに求められている。この回路は、学校教育・社会教育どの教育現場に共通する。To be という人格形成が、一つひとつの講義で向いている方向だ。そのような方向を向けるようチェックをするのではなく、結果として実現していることが肝心だ。おそらく、社会教育ではさらに Learning to change が強く付加されるのだろう。講座を通して、地域が変わっていく、これは日常の課題であり、究極の課題でもある。

めぐろシティカレッジが開講した当時は、受講者の大半が私より年上の方々だった。それが徐々に変化し、いつの間にか、私と同年齢の方が多くを占めるようになって来た。時間の経緯とともに、私も成長し、めぐろシティカレッジも成長を遂げているのか、常に問われる課題となっている。

受講者の支持の原点は、学ぶ喜びを得ることができるか否かにある。カリキュラムを組む側として、現実とはるかにかけ離れた課題を並べる面白さと、これを学習プログラムとした場合、受講生を集められるかという危険との、二律背反の面を考えなければならない。半歩先の問題を提起することは、継続する

うえでかなり重要なことのような。新しい視点や課題を時には大胆に提起する、しかも大地にしっかりと根を張っての提起は、生涯学習では肝心なことだと思っている。

20年をへて、めぐろシティカレッジの活動をもう一步進める上で、市民参加型のカリキュラムづくりは重要な課題だと思う。受講者のニーズを捉えること、ニーズの把握に努め、同時にそれを踏まえてもう一步先を提起すること。このあたりが今一番力を注ぐべきことがらだと思われる。

ここでめぐろシティカレッジ20年間に実施した講義内容全てを示してみよう。もう一度聴きたい講義や改めて聴きたいと思えるものが、いくつもあがるはずだ。講義を映像・音声として残しておけば、巨大な学習の束が・生涯学習の先端の実践が示されているに違いない。アーカイブをつくることは今問われている課題だと思う。講義は教室に止まらず、現地実習・巡検を組み込んでいる。さらにことしで3回目になるが、宿泊を伴う実習「修学旅行」も展開している。これも今後広げていく課題になっている。もう一つ、毎年開校式でめぐろシティカレッジ学長の特別講演が組まれているが、これもめぐろシティカレッジの「質」と「学習の方向」を示すものとなっている。開校式のオリエンテーションにふさわしいものになっていることを改めて認識したい。